

「カンボジア」と日本のつながり

松田 典子
厚木市立相川中学校

◆担当教科：英語 ◆実践教科：総合、学活、道徳 ◆時間数：7 時間◆対象学年：中学2年生 ◆対象人数：34名(内容により103名で実施)

指導案

(1)実践の目的

- ・「カンボジア」から他国についても興味を持ち、世界に目を向けるきっかけを与える。
- ・現地で活躍する人の考えや協力事業を通して、「国際協力」「援助」について考える。

(2)授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	地球の食卓	フォトランゲージの手法を使い、食生活と国の文化歴史の関わり気付く。	・地球の食卓、写真 ・ワークシート
2	カンボジアってどんなところ？	・自分自身が持っている「カンボジア」のイメージを伝え合い、写真・映像や資料からカンボジアについて知る。	写真映像 (パワーポイント) ワークシート
3	カンボジアに暮らす子供たち	・グループ内で写真から読み取れることを話し合い、カンボジアの生活を想像する。	写真、ワークシート
4 5	世界がもし100人の村だったら	・世界の現状と課題を知る。 ・世界の貧富の格差について問題意識を持つ。 ・「世界がもし100人の村だったら」の朗読。	「世界がもし100人の村だったら」
6	援助する前に考えよう	・ものやお金を贈る援助について考える。	写真
7	カンボジアと日本とのつながり	・カンボジアで活躍している人々を紹介する。 ・カンボジアでの支援の実態を知る。 ・自分達の身近な商品がカンボジアで作られていたりする現実を知り、日本とカンボジアのつながりに気づく。	写真

授業の詳細

○1時限目：地球の食卓

生徒たちにとって身近で、興味のある「食」から取り上げることにした。写真から読み取ることのできる情報を班ごとで話し合い、その国はどこなのかを予測し、発表した。同時に服装・文化・食事について触れた。生徒は、日頃食べているお菓子が、海外の食卓にのっていることに驚き、服装や食事に大変興味を示していた。

生徒の感想の中では、「外国＝遠いと思っていたけれど、普段食べているものが同じだったりして驚いた。」という内容のものが多くあった。今食べているものが、どこから来ているのか？少し目を向けるきっかけになってもらえたらと思う。

この授業の中で、一枚の写真から得られる情報が、その国すべてであることにまとめてほしくなかったため、授業後半で自分達の生活についても触れることにした。自分たちの普段の生活や食事について伝え合うことで、同じ日本でも、家庭により食事や行事の過ごし方の違いに気づき、あくまで写真の情報も一般的といわれるものであることも強調して伝えたつもりである。

生徒はいろいろな所に目を向け、活発な発言がみられた。しかし、1枚の写真だけで歴史・文化などさまざまな展開方法が考えられる。50分という限られた時間の中で、どこに焦点をあてて実施するかを明確にしておかないと何が言いたかったのか、生徒に伝わらないで終わってしまうため、事前の準備がさらに必要であると感じた。



○2時限目：カンボジアってどんなところ？

以前道德の授業で、「国際協力」とは何かを考える内容に触れた。その作品の中には、“日本から送られた物資が、相手にとって本当に必要なものなのか？”などカンボジアの様子も触れている内容であった。そのこともあり、生徒は全くカンボジアについては知らないわけではなかった。が、そこに描かれていた子供の写真（送られた物資で、ドレスを着て、大きすぎるサイズのスリッパを履いている女の子）が印象的であったようで、生徒のイメージは「貧しい」「かわいそう」「何もない」などマイナスイメージが多かった。逆に私が以前持っていた『地雷』というイメージは、我がクラスの生徒にはほとんど無いことに驚いた。中には「地雷って聞いたことはあるけれど何？」という生徒もいた。時代の変化とともに、生徒にとっては知らない過去になりつつあること、そして自国以外への情報の不足、興味の減少を身に染みて感じた瞬間であった。

生徒同士でカンボジアのイメージを伝え合った後、私が今回の研修で体験したことを、パワーポイントを使って紹介した。クイズを時折加えながら、写真や動画を通して、歴史、教育制度についても触れた。生徒の真剣な表情や教師との活発なやり取りにより、生徒たちが授業に興味を示してくれているのがわかった。特に自分達との生活に身近でありながら、食事やトイレの違いなどに驚いていた。教育制度の違いを知り、「当たり前」だと思っていたことが当たり前でなかったことへの驚きは大きいものであった。中には、小学2年生に進級できない子供の数やその事実ショックを受けている生徒もいた。

どこか遠い国のように感じていたカンボジアだが、ワット・ポー小学校の仲間が自分たちの作った折り紙のプレゼントに喜んでいる姿をみて、カンボジアが少し身近な場所を感じたようであった。

生徒の感想には「プレゼントを喜んでもらえて嬉しかった。」「子供たちも働かないといけなから、学校にいけなくて、かわいそうと思った」「‘貧しい’という印象があったけれど、子供たちの笑顔がよ

かった。」「食が豊かだと思った。」「日本は豊かな国だと思った。」などか書かれていた。

‘豊かさ’ この言葉こそ、私自身がこのカンボジア研修で同じ研修員さんと悩み、考えたものである。生徒の考える ‘豊かさ’ とは何だろう？じっくり互いに考えていきたい。



○3時限目：カンボジアに暮らす子どもたち

6枚の写真を使って、カンボジアの子供たちの「名前、年齢、好きな教科、今ほしいもの、将来の夢」を各班で予測して発表した。生徒達は写真をじっくりと見つめ、なぜその答えを導いたのかも考えていた。最初は写真に写っている子供たちの服装をみて笑ったり、名前をふざけて書いたりしていた生徒達だったが、正解を発表していくうちに、生徒の表情も真剣な表情に変わっていった。‘自分の年齢が分からない’ という答えは、誰もが想像出来なかった。びっくりしていたのと同時に「なぜ？」生徒自身が疑問を投げかける表情が印象的である。教育の大切さを生徒は感じていた。また、以前同じ質問に自分達も答えていたので、比較しながら、同じ年齢の子供達と同じ所・違う所を探して話した。最後に、今回の授業を通してどう感じたのか、付箋に書いてもらった。生徒の感想から「日本と違って12歳なのに、小学1年生と知ってびっくりしました」「大きな夢を持っているのはすごいと思った。」「(名前を考えて書く作業で)みんな笑って書いていたけど、まだ私達に知らないことがたくさんあるのだと思った。」など自分達と重ね合わせながら書いていた。また「自分達は裕福だなと思った。」「お金をあげたい。」や「本当にこんなに貧しいのかな。」などが書かれていた。1限目に私が気にかけていた‘1枚の写真から得られる情報がすべてではない。’ことを伝えきれていなかった。情報が偏っていなかったか？もう一度振り返り、次につなげたい。



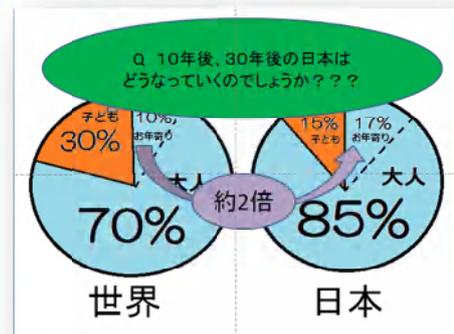
	名前	年齢	好きな教科	今欲しい物	将来の夢
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					

2冊 組 () 組

○4・5時限目：世界がもし100人の村だったら

4時限目は、3クラス101名（2名欠席）の生徒と共にパワーポイントを使いながら、ワークショップを実施した。「世界の問題を身近な問題と感じられるようになる」を目標に、以下の2点について取り上げた。①日本と世界の人口における子供、大人の割合構成を体感する。②世界全体の富の配分がどのくらいなのかを体験する。

- ① 1人ひとりに配布されたカードの色をみて移動し、どの大陸なのかを伝え合った。また、紐の中に同じグループで入ることで、人口密度の違いを体感した。その後同じカードを使って、大人、子供、お年寄りに分かれ、世界の人口における大人の割合を体感した。また、日本の現状も伝え、日本は世界に比べ、少子化と高齢化が同時に起こっていることを伝えた。



- ② も同じように、カードの指示に従い、A国、B国、C国と仮に立て、それぞれの国の代表者に富であるペットボトルを差し出した。たくさんのペットボトルを小数の人数で分ける代表者。逆に1本もないペットボトルを大勢の仲間と分け与えなくてはならない現状を体験した。生徒の感想から、「人数が多いのに与えられるもの（富）の量がすくないのはおかしいと思った。」「格差が激しく、富が一部に集中しすぎている。」「自分が豊かな所に住んでいるのが分かった。」「みんな平等になったらいいなと思った。」などの感想がでた。



生徒なりに「なぜ？」と考えるきっかけになった。どうしてこんな現状があるのか、体育館から教室に戻る間も話している生徒もいた。5時限目は、前回のワークショップを振り返りながら、各クラスで「世界がもし100人の村だったら」のメッセージを一人一文ずつ読んだ。その後、気になった部分に印をつけ、なぜその部分を選んだのかを話し合い、全体を通しての感じたこと・考えたことを発表した。「文字が読めるだけで「幸せ」ということに驚いた。日本では、当たり前なことだけどそれができない人がいっぱいいた。」「100人の村にしたなら差が本当にはっきり分かる。」など様々な感想が出た。前回のワークショップで富の差を自ら体験したからこそ、生徒はその悔しさ、申し訳なさ、そして喜びもあったようだ。自分で体験して、改めて自分だったら…？と考えていたように感じた。



「もし世界が100人の村だったら」のワークショップを授えて

2年 組 氏名()

・それぞれの活動を通して感じたこと、考えたことを書いてみよう。

1 大陸ごとに分かれてみて・・・

あなたは何の地域でしたか？(アジア・アフリカ・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ)

2 日本と世界の人口に比例する割合を割って(大人・子供・・・)

あなたは何の役割でしたか？(大人・子供・老年等)

3 「世界の島」を体験して

あなたは何の島でしたか？(心臓島・島島・心臓島)

自分自身の島をみてどう感じましたか？

・他の島の人をみてどう感じましたか？

活動全体を通して、感じたことや考えたことを書いてみよう。

○6時限目：援助する前に考えよう

JICAの研修と同じように、場面を想定させながら、1枚の看板『おねがい：この村の学校はお金がなくて困っています。あなたの寄付があれば、もっと子供たちに教材や道具を買ってあげられます。どうかあなたの10ドルをこの学校のために寄付してください。 アイコ ナカムラ』のメッセージを受け、自分達ならどうするかを班ごとに意見を出し合った。「10ドルなんて もったいないからあげない。」「かわいそうだからあげる」など同じ班でも、意見が分かれ結論に困っていた。(「かわいそう」や「やる(やらない)」など気になる言葉はあったが、あえて指摘せずすすめた。)困っている班には、答えを強制せず、困っている理由をみんなに述べてもらうことにした。議論を続けるうちに、賛成派の生徒が「やっぱり 相手が分からないからやめておこう。」や逆に反対派が「10ドルだったら漫画を少し我慢したらいいじゃん。やっぱり寄付しよう。」など考え、意見が変わったり、迷ったりしていた。生徒それぞれが意見を出し合い、話し合ううちに、「もったいない(からあげない。)」というセリフは聞こえてこなくなった。生徒なりに感じたものがあったのだろう。中には「お金は誰かが使うかもしれないから、必要な物の方がいいのではないか。」「1回だけあげても…」など踏み込んだ意見も出てきた。そこで以前の道徳内容に再度触れたり、JICAで活躍されている日本人についても触れた。どの答えに対しても正解はない。生徒それぞれが考え、意見を出した状態で終了の時間がきた。

○7時限目：カンボジアと日本とのつながり

研修で撮影したカンボジアの写真をみながら、今までの授業で行った内容を板書し、振り返った。そこでカンボジアで活躍している日本人の紹介と、その方々からのメッセージを伝えた。カンボジアの小学校で指導している方、教育行政に携わっている方、シルクを作り村の人達の生活を支援している方…私が出会った方はごくわずかだが、生徒に伝えた。

生徒は、大人を教育する人がいることにまず驚き、そこに日本人が活躍していることにも驚いていた。「助けることは、物やお金をあげたりすることだけではないのだと知った。」生徒の感想を聞いて、まず『知る』こと、そのきっかけを私達大人は与えるべきだとつくづく感じた。

最後に生徒達が、日頃買っている洋服がカンボジアで作られていることを話すと「日本は助けているみたいだけど、助けられている。」と感想を書いた生徒もいた。

成果と課題

カンボジアに行って、ゴミが多く散乱している場所での写真撮影をするべきか、すべきでないか？私達はカンボジアの‘マイナス’部分を写真に残そうとしすぎていないか？相手はどう感じるのか？自分がその立場だったら？参加者と悩み、考えたことを鮮明に覚えている。

同じように、クラスの生徒にどこまで伝えるべきか？この写真をみせたら、この事実を伝えたら、カンボジアを悪い印象にしてしまわないか？など考え、なかなか進められないときもあった。けれども、私の目で見た事実を伝えることに決めてからは、生徒と一緒に考え、じっくり話すことも出来たので充実した時間であった。

生徒に『今までの活動の中で何が印象に残っていますか？』この質問に対して、『100人村をしたこと』が1番多かった。実際に体験したからこそ、日本にとって当たり前のことが、他の国ではそうでないことなどに気づいたり、「なぜ？」と考えるきっかけになったのだと思う。

ほかに、『折り紙（でプレゼント）を作ったこと』も多くあった。実際に自分達で作った折り紙がカンボジアの小学校の生徒の前で披露され、すごく喜んでもらったことが嬉しかったようである。私は『授業の構成』の中にある、7時間の中で答えるものだとばかり思っていたため、印象に残った活動が『折り紙』の答えには少し驚いた。何を作ったら喜んでもらえるのか？顔の知らない子供の好きなものは何だろう？生徒なりに考え、作ったものであったからこそ、相手が喜ぶ姿を見て、心から嬉しいと素直に生徒は感じたのだと思う。‘相手のことを考え、行動する’ 「援助、支援ってなんだろう？」私が生徒に問いかけてきたが、実際には生徒から知らされた気がした。

7時間での授業では、上記の目標は達成できたとは言えない。最後の振り返りで「今僕がここにいるのも、他の人が支えてくれていると感じた。貧しい国の人々に何が出来るのか？考えたけど僕にはまだ見つかっていませんが、だんだん見つかると思います。」と書いた生徒がいた。「貧しい」「豊か」この言葉について機会をみつけて一緒に考えていくこととして、「カンボジア」から他の国に目を向けるきっかけは与えられたのではないかと思う。

私自身、生徒や同じ職場の仲間に‘国際協力’や‘支援’について学んだことを伝えたいと思い、この研修に参加した。JICAの皆さま、現地の人々、活躍する日本人の方々から数えきれない程多くのことを教わった。同時に授業を通して生徒から逆に考えさせられ、教えてもらうことも多くあったと感じている。「カンボジア」をきっかけに私自身も他国についてさらに深く知りたいとも思った。生徒と共に、今後も学び、考える授業を実践していきたい。

◇ 参考資料

- ・新・ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら 開発教育協会
- ・写真で学ぼう！「地球の食卓」学習プラン10 開発教育協会
- ・「援助」する前に考えよう
～参加型開発とPLAがわかる本～開発教育協会
- ・「自分を考える」「国境線が鍛える共生の思考」 あかつき

